

平成 21 年度 第 3 回心理学教育 FD/IT 活用研究委員会議事録

- I. 日時 : 平成 21 年 9 月 30 日 (水) 午後 0 時 30 分から午後 2 時 30 分まで
- II. 場所 : (社)私立大学情報教育協会 事務局会議室
- III. 出席者 : 木村裕委員長、今井芳昭副委員長、中澤清委員、金子尚弘委員 (skype)
事務局 井端事務局長、森下、恩田

IV. 議事内容

第 3 回委員会では心理学学士力のキーワードについて以下のような討議が行われた。

1. キーワードの理解度を測定する方法については客観テストを導入せざるを得ないのでキーワードについては心理学検定を選択して利用したらどうか。特に学士力 3 については全てに関わってくるので、キーワード項目の確認は全体の枠組みを押さえてからでいいのではないかという提案を含め、説明がなされた。
その後以下のような討論がなされた。
2. 学士力を評価する際、社会の中で心理学の効用や限界を指摘することによって明らかになるものもあるので、効用や限界のような外部的な基準を取り込めないかという提案があった。
3. そのような基準を学士力のどの箇所に置けばいいかという議論となり、別項目として取り上げるのではなく学士力 2 の中に入れれば、学士力の有効な範囲を認識して用いることができると提案があった。その結果、学士力 2 の到達度に効用・限界を加えることになった。
3. 次に文言中「科学的」という用語は他分野の人からは心理学は足りない所があるのではという印象を与えるので不必要ではないかという意見が出された。自然科学を意味しているという意見に対して、はっきりと「自然科学的」と記するとそうではない心理学分野もあるので避けた方がよい、効用の限界、有効性の範囲で説明すればよい、実用性、適切性について認識できるようにすればよい、などの意見が出たが、心理学の科学的手法とすればよいのではないかという意見を採用した。
3. 社会に出てから他の専門分野の人と協力して仕事をする時心理学的手法についての立ち位置を明確にしておく必要はないかとの質問が出され、学士力が社会で応用される時の限界として把握すればよい、学士力 3 の範疇であり、態度や姿勢として上げておいた方がよい、企業に入ってからチームを組んで仕事をする時のことで企業の問題ではないか、などの意見が出された
4. そのことをどこに置くかということについて、他領域の人たちと協力して仕事をするためには学際的な協調性が必要であり、卒業時には供えておくべき特性であるという視点を持つために学士力 3 の B に括弧付けで「将来の課題としての学際的な視点」という文言を入れることに落ち着いた。
5. 委員から提案案について委員長から現実的に考える時に「基本的、応用的」という区

別は難しいのではないかという質問があり、それは基本とか応用とかいうのではなく、水準1、水準2と表現しても良いものだという説明があった。また物理学分野では基礎、応用という分け方をしており、それに沿った区分は役に立つのではないか意見が出された。

6. 仮説を立てるというスキルが学士力2には入っていないがという質問が出された。「説明できる」を「手法を用いることができる」というスキル面の強調が必要ではないかという意見があり、「説明し、実施できる」とした方がよい、それを別項目にすればよいなどの意見が出され、ひな形を作るのでネットで協議してほしいと提案があった。また知識を持つ以前に「関心」を持つことが重要との意見や、原理性に気づくというのは大事ではないかという意見が出された。

最終的な融合と取りまとめについては次回に持ち帰り宿題となった。

本日の協議を踏まえた修正案をネットで提出したいと申し出があった。

以上